

出題分析			
試験時間	60 分	配点	70 点
		大問数	1 題
分量 (昨年比較)	[減少] 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較)	[易化] [同程度] 難化]
<p>【概評】</p> <p>近年、課題文の数が1つの場合と2つの場合があったが、今年は課題文が1つの出題形式であった(2019・21・23・24年度と同じ)。課題文の分量は、昨年より1ページ半ほど減少した。設問について、Aは課題文の内容について説明する問題(200字)で、Bは自分の考えを論述する問題(400字)であり、例年と同様の出題だった。設問Aは、例年の経済学部らしいスタンダードな内容説明問題だが、まとめるべき内容が明確であるため、受験生間の得点差はつきにくいだろう。一方設問Bは、自由主義者と保守主義者が対立する具体的な問題の例を日常生活や社会問題などから設定し、自由主義者であればどうするか考えるという理解力と発想力が問われる問題だった。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	<p>課題文の内容理解を問う問題1問(200字以内)、意見論述問題1問(400字以内)</p> <p>出典：F.A. ハイエク著、気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件 [Ⅲ] 福祉国家における自由』(春秋社、2007年)</p>	<p>課題文は、自由主義者、保守主義者、社会主義者の考え方について関連付けて書かれており、変化を極端に恐れ、権威による統制を支持する保守主義者の性格を批判している。設問Aは、変化を嫌い、現状維持のために政府の権力を使用する要因となる、保守主義者の特徴について説明する問題。本文中の「保守主義の権威にたいする愛着および経済的な力にたいする理解の欠如」という記述を手がかりに、本文全体を踏まえて説明するとよい。設問Bについて。社会主義者が保守主義に共感する理由については、下線部Bに至るまでの部分、すなわち自由主義者は他の道徳的信念を強制しないが、保守主義者と社会主義者は強制するという内容をまとめる。自由主義と保守主義が対立する例は、社会問題でいうと、個人の自由を尊重するかどうかという点で対立する例を書く。日常生活について考える場合は、学校や家庭間でのルールや価値観の違いに着目するとよい。</p>	標準

合格のための学習法

2027 年度以降、入試方式変更により該当科目の実施がなくなる予定のため、掲載を控えさせていただきます。